

渡さんは先代からの地道な土づくりと、ICT（情報通信技術）を活用して効率的な農業を展開。2018年産の小豆は天候不順に見舞われながらも、10アール当たり収量は386キロを確保し、全道平均を上回った。渡さんに昨年の営農、農業経営について聞いた。

◆積極的に堆肥入れ土づくり

ー作付面積、作物は。

45ヘクタールで小麦、ジャガイモ、小豆、金時、大豆、スイートコーンを生産している。

ー昨年の小豆の高収量の要因は。

父の代から40年以上、積極的に畑に入れている堆肥と有機物資材による土づくりが一つ。去年は、小豆で試験的に行った不耕起栽培もうまくいったのでは。

ー土づくりの内容は。

近くの酪農家から麦わらとの交換で堆肥を手に入れ、10アール当たり4トン投入している。うちの畑は石が多く、肥料持ちの良い畑ではないので堆肥を入れている。秋の忙しい時期にまくので、コントラを使っている。豚ふんペレットも入れている。人によっては無駄かもしれないが、有機物はゆっくりじんわり効き、天候不順でも極端に悪くないイメージがある。

ー他に心掛けていることは。

何ごとも適期に作業している。土壌水分が高いのに無理に畑に入ったり、耕起作業をしたりはしない。無理をすると秋まで悪い影響を引きずる。畑をよく見て、諦めるときは諦める。

ー営農の情報収集にも熱心と聞く。

31歳のときに父が死去し、その後は地域の先輩や友達にいろいろと教えてもらった。生育管理で分からないこ

とはすぐに聞いた。農業士の集まりにも誘ってもらい、技術力の高い農家から話を聞くことができた。人には恵まれていると思う。今回もそのおかげで受賞できた。

ーICTの活用は。

4年前にGPSトラクターを導入し、整地、は種、カルチベーターを行っている。作業効率は高く、運転しながら次の仕事を考えることができる。三角の畑が多いのでブロードキャストで落としたい所に追肥できるのもいい。

ー今後の目標、目指す農業者像は。

干ばつや湿害に影響しない畑を作るのがテーマ。大規模を目指すより、余裕を持ちながら営農していきたい。



高性能の散布機と渡さん